

2-91



明治三十一年五月五日至八日於東京

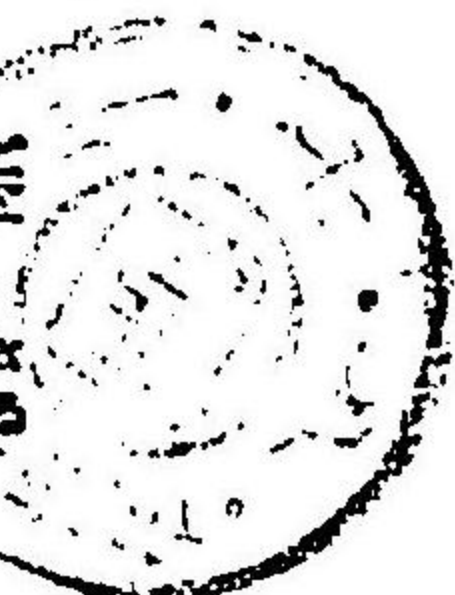
# 集會記畢

非賣品

本誌目次

- 路加傳一章五十三節
  - 彼得前書二章二十四二十五節
  - 約翰傳一章四十三節至終
  - 馬可傳之講讀(一章至三章)
  - 羅馬書四章二十三節至同五章二節
  - 主の働きたまふ事
  - 馬可傳之講讀(四章至六章)
  - 路加傳十五章二十三二十四節
  - 路加傳十二章一節至十二節
  - 詩篇二十三篇五節及默示錄三章十一節
  - 馬可傳之講讀(七章至十章)
  - 腓立比書四章一節至終
  - 馬可傳之講讀(八章至十四章)
  - 詩篇第四篇三、六、七八節
- 此他 朗讀せし聖言及び讚美歌等

集會記事



親愛なる兄弟等よ、兼て我儕が願ひわたる各地兄弟等との集會は豫期の如く去五月五日  
 日至八日の四日間、主の大なる恵に由て滞りなく開會する事を得たり、今其會況を  
 略記せんに、集められし者は外國の兄弟等を初めとして、大阪、京都、神戸、横須賀、  
 横濱、浦和、大宮、奥州仲野、全渡瀬、全仙台、紀州、信州及び當地の兄弟等外若干  
 名にて其數無慮百三十餘名、而して集會は五日至七日間は毎日午前八時より祈禱の爲  
 に集り、十時よりは哥前十四〇二十六以下の集會を保ち、午餐を共にして午後は二時  
 より聖讀會を保てり、八日主の日は午前九時よりパンを擘く爲に集り、此日も午餐  
 を共にして午後二時より哥林前十四〇二十六以下の集會を保てり、讀べき主は御名の  
 故に此集會を祝し萬事我等が思ふ所願ふ所に超りて善きに導き、我等をして御名を頌  
 しめたまひし事實に感謝に堪へざりしなり、余時に馬可傳三〇十三、十四、卅四、同  
 四〇十、十一節等の聖言を思ひ起し、主に召されて彼と偕に置かれ又彼の側に坐して

彼に視環され而して彼より教訓を受くるの特權と幸福との如何に大なるかを一層深く嘗ひて轉た感謝の念に溢れしなり、「汝の前には充足する喜びあり、汝の右にはもろくの快樂とこしへにあり」（詩十六〇十一）とは宜なる哉、是に於てか我儕は「御傍にゐんと主耶穌を待つ御傍はこよなき幸よるこひ」と聲高らかに歌ふを得べし、主イエスよ速に來りたまへアメン、

今左に今回受けたる教訓と、機に適ひしと思ふ讚美歌及び朗讀したる聖言などを聖靈の御導に由て予へられたる順序に従ひて書き綴り之を親愛なる兄弟に分つ、但し本誌は其幾分を省略記載したる者なれば讀者請ふ亮焉 願くは讚へき主、御名の故に此記事を祝したまはん事を、

編者識

第 壹 日

- 詩篇二十三〇一、二節、馬可傳六〇卅、卅一節四十二節朗讀
- 讚美歌第六十五番、第百六十五番

○路加傳一章五十三節

「飢たる者を美食に飽せ富る者を徒く返らせ給ふ」と此言を味ふべし、我等は主の恵に由て此數日茲に集めらるゝに至りしが、我等の心確に飢たる者として御前に來り居らば幸なり、其人は必ず多くの糧を以て飽しめられ家に歸るを得べしと雖も、若し然らずして、己れ自ら富る者と思ひ、更に慕ふ處なき者は必ず徒しく返らしめられざるを得ざるなり、主は與ふる事を好みたまふ御方なれば多く求る人は多く與へらるべし、我等が多くの兄弟等と相見て喜び共に親しく交る事之れ素より福なる事に相違なしと雖も、是は我等が集會の目的にはあらざるなり、主イエス御自身の外何物も我等の心を滿し得る者なしと知り、眞實彼の必要を感じ居る人は幸なり、

往昔夫のイスラエル人バロの權下にありし時に彼等が執る所の日々の務は中々苦く嚴かりし事多かりき、殊にかのエジプトといふ國は元來雨なき所故、彼等は已が糧を得ん爲には自ら種を播き又足を以て川より水を灌ぐ勞力を要せしなり、彼等は、かくも困苦勞力を感せしと雖も此國には糧いと多くして彼等は毫も飢を知らざりしなり、此故

に彼等は常に肉の鍋の側に坐し飽までパンを食ふ事を得たるなり（出埃十六〇三）然るに彼等一朝其國より救出されて夫の曠野の途に来るや、其處は水なき乾ける地なりしが故に忽ち糧に乏くなりて始めて飢を感じたり、されど彼等が此處に來りて此新經驗に出逢ふ事のエホバの御旨にてありし事は申命記八〇二、三に於て知られたり、即ち「汝の神エホバ此四十年の間汝をして曠野を歩ましめたまへり……是汝を卑くし汝を飢しめまた汝の先祖等も知らざるどころのマナを汝等に食はせたまへり、是人はパンのみにて生る者にあらず人はエホバの口より出る言によりて生る者なりと汝に知らしめんが爲なり」と、特に汝を飢しめとあるに注意すべし、

我等も亦彼等の如く曠に世人にてありし時には肉の慾に従ひて日を送り肉と心の慾をなして飽まで飲み飽まで食ふ事を得て其時我等の靈は毫も飢る事知らざりき、然るに一朝恵に由て主を信じ世より救出さるゝに至るや、始めて己が心に飢を感じ來りたり、されど此心を満し得る物は最早此世にある物にあらざりて天より降れる生るパンなる主御自身にてある事は恰もイスラエル人が曠野に於ては天の穀物なるマナの

外又何物をも得ざりしが如し、而して其マナはイスラエル人が曾てエザプトにて味ふ事を得ざりし物又彼等の先祖等も知らざりし所の物にてありしが如く、我等が今主御自身を糧とし之を以て飽しめられつゝある事は實に我等も曾て知らざりし所の事にし又世人の今尙は少しも知り得ざる所の事なり、如此我等が今の心は主イエスを以て飽しめらるゝ者とせられしと雖も、我等の心若し既に飽けりと思ひて主を益す識るの必要を打忘るれば、取も直さず其心は自ら富る者となりたるが故に其人は必ず徒く返らしめられざるを得ざるなり、さらば我等に要する事は、我等の心常に飢を感じて主を慕ひ居らん事なり、此故に我等は今日此心を以て各々主の前に集められ居らば幸なり、主は必ず善物を以て我等の心を飽しめたまはん、

○彼得前書二章二十四、二十五節

我等此所にかく集められて偕に主を喜び御言を聽きて心みたさるゝは實に福なる事なり、我等はすべての事たゞ疵のみなりしに彼の鞭うたれたまひしによりて我等は醫

されたり、「神は我等をして其御前に聖く疵なからしめん爲に世の基を置かざる先上りわれらをキリストの中に簡び置き」其愛によりて定めたまひし御旨をキリストによりて成就したまへり、實にキリストは木の上にかゝりて我等の罪を自ら己が身に任ひたまひたるなり、われらはキリストの血により贖即ち罪の赦を得たるのみならず、愛せらるゝ御方即ち御子主イエスの御身にありて受入れられ恵まれ今喜びて神の恩の榮を讀めたふるを得（弗一〇六、七）誠に感謝にあまりある事ならずや、此彼前二〇廿四、廿五兩節に於ても亦主は善牧者にして我等を御自身のものとして守りたまふを知る、而して廿五節の前に廿四節のことを記したまへる事味ふべし、恰も詩篇十二篇廿三篇の順序と同じ即ち二十二篇の如くキリスト我等の罪の爲に苦難を受けたまひしが故に二十三篇の如く「主は我牧者なり云々」と歌ひ讀むるを得るなり、主は我をみどりの野邊にふさせ、いこひの水ぎはに導きたまふ又善物を以て我等をみたまめたまふ我等が今日の如く、如此御恩の中に居ること皆キリストの御苦の結果にあらずして何ぞや、我等は主に何の善物も献けざりき、却て苦草を其食にあたへ濁さ

たまひし時に醋をのませしなり（詩六十九〇廿一）然るに濁き慕ふ靈魂をたらはせ飢たるたまひしを嘉物にてあかしめたまふ（詩百七〇九）主は常に我等に御目をそゝぎて我等を導き我等の心を充足しめたまふ、賽五十八〇十一の如し、我等は我等の罪の故に主に無限の御苦を予へしに主は我等を救ひ我等をさよめ我等を導き我等に溢るゝまで嘉物を充たしめ、恩寵と眞理にて充ちたまへる貴き御品性をもて我等の心を充足しめたまふ（約六〇三十七）いかで溢るゝの感謝を献げざるを得んや、

○約翰傳一章四十七節至五十一節

ナタナエルが主を言現はし、事と主が天ひらけて云々と曰ひたまひし事を思ひひて福なりき、此處は實にイスラエルの眞の王と眞の民と出逢ひし處なり、主はナタナエルを詩一篇の忠義者として言現はしたまひしかば、ナタナエルは又主を詩二篇の神の子、王として言現はせり、主は父の生みたまへる獨子にましますと、又地上にて處女マリヤより生まれたまへる人の子にまします、此處と詩篇第一、第二とを辭に對照

すれば實に美はしきを覺ふ、されど王として祝したまふ事よりも更に大なる事あり、  
 即ち天開けて神の使は自由（自由）に祝福（祝福）を持來る而して人の子は梯（梯子）となりたまふなり（同  
 五十一節）我等は異邦人なれば王の下にありてはイスラエルと同等の祝福を受ける事能  
 はされど、主が人の子として神の榮を顯はしたまひて神の祝福は廣く人間に及びたる  
 其の祝福に與かりたる事感謝の至ならずや、人の子は神の榮を顯はしたまへり（約十  
 三〇卅一）神は十字架（十字架）上にて隈なく榮められたまへり、神の義も、神の愛も威嚴も眞  
 理も全く顯はれたり、神は此故に此人を復活らして其右にあげ彼に由て罪の赦を偏く  
 宣傳へたまふ、實に天はひらけて恩寵は義を以て、宰るに至れり（羅五の廿一）是は  
 いとも奇しき、又大なる事にあらずや、

○馬可傳の講讀

先づ一章一節と十六至二十節、同四章三十五至四十一節、同六章四十五至五十二節等  
 を朗讀

以上の聖言を讀みて弟子等が主より如何なる教訓を受けたるかを注意して學ばい幸  
 なり、彼等が先づ聞きし所の事は一〇一にして即ち神の子イエス キリストの福音で  
 ふ事なりき、人は誰もイエスを神の子として榮めず又其名を輕んじて毫も之を貴ぶの  
 心なければども、彼が神の御子にいまして且つ其名の貴きことは腓二〇十に於て示され  
 あるが如し、彼曩に世に來たまひし時、若し御親の榮光を以て臨たまひたらんには  
 人誰も彼を輕蔑する事能はざりしならん、されど彼はイエスてふ名即ち其民を罪より  
 救ひ出すとの名をばち而かも謙遜りて現はれたまひしが故に、人々擧て彼を輕蔑する  
 事を得たるなり、されど我等は今彼に由て救はれたるが故に、彼の名の貴きを知り、  
 又榮め得る者とせられたり、此恩は實に感謝の外なし、  
 可一〇二に於て「視よ我なんぢの面前に我使を遣さん」と記さる、神の使が主の面の  
 前に遣はされし事は恰も王の使者が或人の前に遣はされし時に其人は王と同様の地位  
 にある事を示すが如く、之に由て主の身分が神と毫も異らざるを示し且つ神が主を王  
 として取扱ひたまひたる事を明にするなり」撒加利亞十三〇七に「我伴侶なる人」

この言あり、神は主イエスを指して伴侶なる人と云ひたまへり、かく彼は神の伴侶なるが故に彼世に來たまひし時に自由に多くの軍勢を伴ひ得たるも、彼は然かするを欲せず、却て罪人を伴とするを喜びたまひたり、彼若し天使を呼びて汝等我に従へと宣ひしならば彼等はさぞ喜び勇みて彼に従ひ奉りしならん、されど彼は之を彼等に向つて宣はず、却て罪人を呼びて我に従へと仰せたまひたり、嗚呼是は何たる嘉音ぞや、之に由ても尙イエスてふ名は罪人の恵まるゝ所の名たる事を知り得るなり、主イエスは御親の思召を以て人々を己に従はせたまふ、我等は天性にしては主を惡み嫌ふ者なるが故に素より彼に従ふの心なきや明かなり、此故に若し彼我等を招きたまふにあらざんば我等は決して彼に従ひ歩む者となる事能はざるなり、夫の彼得の書は實に之等の事に付て多くの教訓を與ふるなり、先づ此書を聖靈に由て記したる夫のペテロを見よ、彼彙には言甲斐なくも一賤婦の前に於て主を識らずと言現はして彼を拒みたる者なりしに、彼一朝聖靈を蒙るに至るや、全く相反して主を榮め貴び且つ彼を惠ある御方と嘗ひて喜ぶ者となりしにあらすや、彼前二〇九に「爾曹を召して」

とあり、彼は實に我等を幽暗の中より召し出したまひたれば唯だ彼が御思召のまゝの惠を知りて感謝するの外なきなり、夫のペテロも先に主が「我に従へ」との一言の下に直に綱を捨て彼に従ふを得しと雖も、若し主、然か仰せたまはずして、唯だ「汝の綱を捨てよ」とのみ宣はし如何にぞや、ペテロは即ち綱をうつ事を以て其業とする者なるが故に彼は唯だ憂へて去り往きしならん、されど主は御思召のまゝの惠を以て彼を招き先づ「我に従へ」と仰せたまひたるが故に彼は思はずも一切を打棄ておきて従ひ奉る事を得たるなり、彼前五〇十にも「汝等を招きし神」とあり、神は我等を忍るべき審判の日に召し出したまふにあらで今の恩の時救の日に我等を世人の中より招き出して窮なき榮光に入らしめんと爲たまふ、此惠は如何に洪大ならずや、如此我等は惠に由て招き出されれば今は唯だ其御方を識りて喜ぶの外なきなり（彼后一〇三）我等は敵たりし者にして、常に世人と心を合せて主を惡みし者なりしに、如此我等を惠に由て呼び出したまひしは恰も夫のソウロがダマスコの途にありし時、己が名を呼ばれて招き出されたるが如し（使九〇三、四）彼が當時如何ばかり主に敵對せしかを

我等は知る、彼が後に至て自ら我は罪人の首なりと言ひしが如く、彼は誠に主の名を  
 惡みし者にてありき、されどかゝる者を召して従はせたまふ主の恵は純粹のもの云  
 はざるべからず、我等も亦今彼の如く、惡人の仲間より招き出されたり、此故に我等  
 が喜びとし又樂みとする所の物も亦全く以前と一變するに至りたり、恰も夫のペテロ  
 が主に従ひし後に於て、再び綱を樂む事をせざりしが如し、而してペテロが喜びて用  
 る居りし所の綱は人を漁る爲には何の用にも立たざれば、彼主に従ひて人を漁る者と  
 ならんには必ずそれを棄てざるを得ざりしなり、人は誰も主の御働きを助くる事能は  
 ず、約六〇十五を見るに當時人々主を捕へて王と爲さんと企てたり、されど彼は素よ  
 り王にいまするが故に人は誰も彼を助けて王とする事能はざるなり、かく主は主として  
 働きたまふが故にかの可一〇十七に於ても、先づペテロに向つて「我に従へ」と宣ひ  
 後「人を漁る者とせん」と仰せたまひしなり、之に反し若し主が彼に命するに人を漁  
 る事のみを以てしたまはし如何にぞや、ペテロはペテロ丈の力あるが故に彼自ら働  
 事を得しならんも、彼の働きは只だ無益に力を費すに止りて、時に其働きは偽の信  
 者を造るに過ぎざりしならん、されど彼先づ主に従へり、之に由て主の御働きのほど  
 を味ふべし、

可一〇二十一以下に於て神の人に對する恵の豐なる事を學ばしめらる、此二十節を見  
 るに惡鬼に憑たる者喊叫いひけるは「嗚ナザレ」のイエス上云々と、彼がかく喊叫ひし意  
 は我をこまらする勿れとの意にして即ち己が働きの邪魔せざる様に願ひしなり、人  
 は皆性質にして惡魔の子なるが故に我等の舊人の中今尚ほ此性質は残りあるなり、  
 此故に我等も亦、時にかの鬼に憑かれたる人の如き願ひを抱くことあり、我等は往々  
 我儘を行ひ遂んが爲には却て主に従ふ事を以て窮屈と感じ甚しくは我儘を行ひ居る  
 時よりも主に従ふ時に喜樂の減じたるが如く思ひ且つ又不幸を招くが如く思ふ事なき  
 にあらざれども、是は正に惡魔より出る思想と云はざるを得ざるなり、我等若し各  
 断しき生命に於て彼に従ひ歩みなば其幸と喜樂とは又他に類ひあらざる筈なり、此  
 故に弟子等も主の召に應じ彼に従ひし後に於て益す彼の品性を管はしめられて喜び溢  
 るゝに至りしなり、



可二〇一以下を見るに茲に一人の病者あり、彼は已が病氣の醫されん事を目的として主の前に近き來りしが、主は彼の病氣を醫すに先ちて、彼の罪人たる事を示したまひたり、人は皆罪人なれども、各自其罪人たる事を打忘れて交際し居り而して誰も此罪人たる事を現はす能はざるが故に互に相稱贊しつゝ喜びて相交る、されど此交際は即ち暗の交際なり、かく人間は已の如何なるかを互に知る事能はざるも、主に於ては然らず、彼は凡てのものを現はす光にいませば、彼の前に来る者は何者にて其光に由て照らされざるはなし、我等若し相互の心中を照し見るの明を有し居らば決て人々を友として親しく相交る事を喜ばざるべし、されど主はかの病者の罪人たるを知りたまひしにかゝはらず、却て彼を友として近き醫したまひぬ、嗚呼彼が御心は如何に恵を以て充てる哉、我等は時に己が心の悪しきに欺かれて自らの全く證術なく且無益なる者たるを打忘れ何か取所のある者の如く感じて威張らんとする傾きあれども、神の御言の前に来る時には忽ち、已か如何なる者にてあるかを明にせられ、而して主の御心のはどを味はしめられ學ばしめらるゝが故に、我等は常に御言の前に在る事を要するなり、

我等は如何程親しき友に對しても己が心底を盡く打明け残す所なく語るを欲せず、尙は幾分か物を隠す事あるを免れざるなり、そは之を語るときには友の前にて耻かか故なり、されど今主を友とする所の我等は却て彼に萬事を打明け申上ざる事に由て自ら損を招くなり、何となれば主は光にいませば我等はかの友人に對する如く、彼の前に何事をも隠し居る事能はざるのみならず、却て幾分の暗處あらんには決て彼との全き交際を味ふ事を得さればなり、而して彼は又愛にいまし惠の主にいませば、我等は彼に萬事を打明くる事を恐るゝを要せざるなり、約翰第一書一〇三、四、五を見よ光にあるの交際の外に全き喜樂の充され居る所あらざるなり、此故に我等若し、己が現時の思想を悉く打明け告ぐる事却て苦みを加へ恐懼を増すに至ると思ひて、之を隠し居る事をよしとせば之は己が心に欺かれたる者にして又サタンの偽に惑はされたる者と云はざるを得ざるなり、世人は暗に居るが故に素より光にいます主に萬事を告ぐる事を喜ぶ事能はざらん、されど我等は今罪を赦されて光の前に置かれ且つ主

を友として相交るの親しき特權を與へられ居るが故に、却て萬事を打明け告げざるならば心喜樂に溢るゝを得ざるべし、是に於てか我等の必要は即ち我等の心の常に飢に居らん事なり、何となれば、我等の心若し飢たる者としてあらんには必ず、満されんが爲に己が求める所を告げずして止む能はざればなり、

可三〇一―六を見よ、我等は恰もかの手枯たる一人の如く自ら王を友として親く相交るの力なき者なれども、主の側に來る時には主は惡鬼を去らしむるも我等を去らしめず、却て親しく交りたまふが故に、我等は此御方に萬事を告ぐる事を躊躇せざるべし、我等は兎角己自身と親しく交る事を喜ぶ傾きある者なれど、然せずして單に主御自身と親しく交る事を以て唯一の喜とせば幸なり、

第二一日

○出埃及記十六章二十、二十四節の朗讀

○讚美歌第三十番 ○以賽亞五十五章四節朗讀 ○讚美歌第八十一番

○羅馬書四章二十三節至五章二節

我等は福音の基礎たる事實をば繰返し繰返し相語らざるべからず、そは之を信するのみに止らず、恒に之を心に記する事を要すればなり、聖靈はラモラに勸るに「我傳ふる福音の如くダビデの裔より出たるイエス、キリスト死より復活し給へるを爾心に記べし」(提後二〇八)の言を以てしたまへり、彼は偽なき信仰を有ち、且つ工人たる賜を受けるたれば彼が此基本的事實を既に業に確信し居りしや論を俟たず然るに彼尙ほ此勸を受けたりき、又聖靈はコリントの信者に告ぐるに「兄弟よ前に我なんぢらに傳へし福音を今亦なんぢらに告ぐ、こは爾曹が受し所之に因て立し所なり我なんぢらに傳へしは我受し所の事にて其第一は即ち聖書に應てキリスト我等の罪の爲に死又聖書に應て葬られ第三日に復活し」(哥前十五〇一、二、三、四)の言を以てしたまへるを見る、我等も同く此福音を受け且つ此福音に立ち此福音に符ふて日を送るべき者なれば(腓一〇二十七)時々刻々之を心に記する事を要するなり、  
備、羅馬書四〇二十三は我等は如何なる主義にて救はれしやと云へる問に答をなせり

本節は創世記十五〇六を引き來りしものにして、かのアブラハムは創十五〇五の如く言ひ給ひしエホバを唯だ信ずる事に由て義とせられたり、夫信仰に由て義とせられたりと録されしは當にアブラハムの爲のみならず又我等の爲に録されしなり、即ち我等も行の主義によらず信仰の主義に由て義とせられたる事毫もアブラハムと異なる事なし、(羅二〇廿七、廿八、弗二〇八、九、參觀)

羅四〇二十四は我等は何を信じて救はれしやと云へる間に答ふるなり、アブラハムは主イエスの御死と御復活との以前に在りし人なれば、彼はイエスを死より復活し、神を信ずる事を得ざりしも、彼は自らに對して約束したまへる神を信せしなり、之に反し我等は我主イエスを死より復活し、神を信じたり、此故に今は此御方を信じて救はれしか又は之を信せずして救を得ざるか、二つに一つにして其中間に在るものあることなし、録して「然は何と言へるぞ道は爾に近く爾の口にあり爾の心に在りとは是即ち我等が宣ぶる所の信仰の道なり、蓋もし爾口にてイエスを主と認はし又爾心にて神の彼を死より復活し、を信せば救はるべし」(羅十〇八、九)とあるが如し、

羅四〇二十五は我等は何故に信するのみにて救はれしかと云へる間に答ふ、主イエスの御死は偏く世の爲の挽回の祭物(約第壹書二〇二)なるのみならず、我等の罪の爲に解されたまへるなり、「彼木の上に懸りて我等の罪(バアテスマを受る迄又は今迄云)を自ら已が身に負たまへり、是我等をして罪に死て義に生しめんが爲なり、彼の鞭朴れしに因て爾曹醫されたり」(彼前二〇廿四)「彼は我等の愆の爲に傷けられ我等の不義の爲に碎かれ自ら懲罰を受て我等に平安を予ふ其撃れし痕によりて我等は癒されたり」(賽五十二〇五)と、主イエスの御死と其効力とは如何に貴き哉、かく主イエスは贖罪の大業を全く成就し、義の故に罪を見遁したまはず、愛の故に人を救ひたまふ神の御心を満足せしめ、十字架を以て窮なく神を榮め給ひたれば、神も亦自の御榮の中に彼を榮しめ、第三日に復活らして其右に擧げたまへるは固より其當然なり、(約十三〇三十一、三十二)實に主イエスの御死は神の義にして其御活復も亦神の義たり、我等は之に因て義とせられたるなり、さらば彼の御復活は我等の義とせられたる證據とらふべし、

羅五〇一、二は我等は信じて如何なる者となりしかと云へる間に答ふる所なり、其一節は過去にして二節の今居る所の恩は現在を示し榮の望は未來に屬せり、而して一節を見るに、我等は四〇二十四の信仰あるが故に既に義とせられて神と和む事を得たるも、是は單に四〇二十五のイエスに頼りてにして決して我等の幾部に因れるにあらざる事を示す、此故に神の義しとしたまひし者は何者も之を認ふる事能はず、(羅八〇三十三)又神の我等に與へたまひし平和は何者も之を奪ふ事能はざれば、我等は之を知りて全き安心を有つ事を得るなり、其二節に於ても「彼に因」とあるに注意すべし、即ち四〇二十五のイエスに因て今居る所の恩に入りしなり、「神の復活せたまひし者は朽果ざりき」との如く、彼は永遠に朽果たまはず、約二十〇二十、二十七、路二十四〇三十九、使一〇三、九至十一の御方は今日只今神の右に實在したまふなり、我等は神に由てキリストイエスにあり、彼は我等の一切なり、(哥前一〇三十)彼は祭司の長として我等の荏弱を体恤(來四〇十四一十六)、保惠師として我等が罪を犯せるとき回復せん爲に禱告たまふ(約第一書二〇一)而して彼は又善牧者にいまし(約十〇十

四)集會の首(西一〇十八)にいます、我等が今居る所の恩は如何に福なる哉、加之我等は又死より復活りて今榮光に在す「彼に因」て榮の望を與へられし事は彼前一〇三、帖前四〇十四一十八、西三〇一四の如し、

我等は死にて復活り今神の右に實在したまふ彼に因て、斯の如き者となりしと雖も、聖靈に由り聖言に由りて、恒に彼が直接の御前を味はしめらるゝこと甚だ大切なり、蓋之に由りて其贖はれたる恩、今居る所の恩、榮の望の恩を益す味はしめらるゝを得ればなり、此故に若し彼との交に在らざれば我等の罪質は善なる者を以てすら、我等を誘惑す事あるべし、即ち律法を眺むる事に由て却て律法に惑はされ或は己が熱心を眺むるに由て其熱心に欺かれ(路廿二〇卅三、三十四)或は智識を眺むるに由て智識の驕りに陥り(哥前八〇一)或は舊人の性質を改良せんとして益す舊人に欺かれる等の如き是なり、特に舊人の到底改良し得られざるは恰も彼後二〇二十二の犬と豕との諺の如し、かく罪質は悪なる者を以てするのみならず善なるものを以てすら我等を誘惑し、凡ての事をもて我等に敵すれば、我等は到底己に由て之に勝つ事能はず、

只だ神より出るものに由てのみ敵に驚かされざるを得るなり(腓一〇二十八)「我キリストと偕に十字架に釘けられたり既我生るにあらずキリスト我に在て生けるなり」とある如く我等の生命はキリストのみなれば只彼に由てのみ凡ての敵に勝ち得るなり、此故に我等は最早、己の生命を働かさんと骨折るに及ばず、何となれば我等はキリストの御死を毫も助けざりし如く又キリストの生き給ふ事をも助くる事能はざればなり、彼は只今實際に神の右に生ける御方にいませば、唯だ單純に彼を信じ彼を眺めて日を送るは我等の分なり、實に彼御自身は神の我等に賜へる變らざる恩なり(使十三〇三十四)

### ○主の働きたまふ事

約翰傳五章十七節に「我父は今に至るまで働きたまふ我も亦働くなり」との御言あり、實に主イエスにとりては父なる神の旨に遵ひ其工を成畢りたまふ事御自身の糧なり、而して彼は一の獻物を以て潔まる者を永遠全成するかの贖ひの御業を成し遂げ、

今は神の右に在して其敵を足登となさん時を俟ちたまふことなるが、今かく神の右手に在す間に聖徒の爲には懇求を爲し、福音の爲には弟子等と偕に働きたまふことを思へば我等の心一層に勵まされ、益すはまれを主に歸せざるを得ず、羅八〇三十四節を見れば、我等の罪の爲に死、我等の義とせられん爲に甦らされ、今神の右手に在したまふキリストは即ち我等の爲に懇求したまふ御方と知る、又馬可傳十六〇十九、二十節を見れば、今神の右手に坐したまへる主イエスは福音の爲に働きたまふを知る、神は我等の既に救はれし如く尙人々の救はれんことを望みたまふ御方にして、主イエスは尙も福音を以て働きたまふなり、此等の事を思ふは福なりと謂ふべし、使徒行傳を讀めば迫害の時にも弟子等益す福音を傳へ何處にも勝を得たり、是れ實に主が偕に働きたまふに因るなり、徒八〇四節にかの散されたるもの等偏なくゆきて福音を傳へしが如き即ち是なり、同十一〇二十、二十一に主の手之と偕にありと記さる、主親ら福音の爲に働きたまふ證據なり、同十二章へロデ集會を迫害してヘテロを獄に投じ固く之を守りしに、主は其使者を遣はして之を救出したまひしのみならず、其二十四節

に「神の道は益す廣まゝ」とあり、かく主の働きたまふことを思へば益す主を信じて  
榮光を神に歸するの外なきなり、

○以賽亞五十三〇十、特に「エホバの悦びたまふことは彼の手に由て榮ゆべし」と朗  
讀す、

○馬可傳之講讀

同四章三十五節以下に就て、 既に三章まで讀み來りて、主が罪人に對して常に御  
意のまゝの恵を現はしたまひしと雖も、人誰も彼を神の子として榮め貴ぶ事をせざり  
しを學びたるが、此事實に由て我等の心の如何なるかを明かに現はさるゝなり、我  
等が心の萬物よりも偽る者にして且甚だ惡き者たるは我等の知る所なるが、我等は  
自ら己が心の如何なるを知る能はざるが故に、例令如何程巧なる理屈を考へ出せばと  
て、それに由て決て己の心の様を知る事能はず、否却て其理屈に由て自ら感はされ居  
る者なり、さればこそ、主イエス世に來たまひし時に人々彼の美はしき容貌なく、慕

ふべき艶色なかりしを見て、彼を神の子として榮むる事をせざりしのみならず、實際  
彼を見し時に己が理屈に感はされたるなれ、如此人々擧て主を拒み棄つるに至りたり  
是に於てか主は眞理の言を以て告げたまふ御方とはなりたまひたり、

同三〇三十二以下茲に記されたるが如く、主の御言を開かんが爲に常に彼の側に坐す  
る人は幸なり、そは其人々は神の旨に適ふ所の人なればなり、當時多くの人々主の側  
に來り坐し居りぬ、彼等は神の言の必要を感じ且つ御言を賜はる彼の恵を知り居たる  
人々に相違なし、嗚呼主に視環さるゝ人は如何に 幸なる哉我等も亦彼等に倣ひて常  
に彼の側に坐し居らん事を望ましまし、

四章には播れたる言の結果の事記さる、サタンは常に播かれたる言を奪ひ去らんとし  
て務め居り、而して磽地にまかれたる種は一の試練に出逢ひて再ひ言を聞くを好まざ  
るに至る人を指し、棘の中に透ちし種は妨げに出逢ひて實を結ぶ事能はざる人を示す  
、是等の譬に由て弟子等は如何に教訓を受けたるぞ、否啻に彼等のみならず、我等も  
亦之を己の心にあてはめて深く學ば、必ず我等の良薬とならん、されど若し己自ら

我は沃壤なれば必ず實を結ぶに相違なしと思ひ言を聞く事に心を用ゐずんば、其人は却て實を結ぶ事能はざる者とならん、かの弟子等も、同じく此思想に由て自ら欺かれたるなり、我等の心は悪しきのみならず、欺く者なれば若し己が心を信じて、我は主を識る事に付ては著しき進歩を見されども、日々進歩しつゝありと思はゞ、其人は却て日々失敗を招く方に進歩しつゝある者なるべし」 四〇二二二、二二三、「隠れて明瞭にならざるはなく云々」と、神の言は實に隠れたる事を發く力ある者なり、主は我等の心の如何なるかを發かんが爲に常に言を予へたまふが故に、我等は彼の前に於て何をも隠し居る事能はざるなり、「耳ありて聽ゆる者は聽くべし」と、聽ゆる耳ある人は實に幸なり、かの弟子等の心、若し我は常に主と偕に歩み居る者なれば、別に聽く耳を要せず、之を要する者は却て他人にありと思はんか、彼等はしか思ふ事に由て却て耳なき人となるなり、かく我等も亦、今日主の前に在て聞く所の教訓は我等よりも他の人の必要と思ひて、己自ら之を心に記る事を知らずんば、同じく耳を失ひたる人となりしなり、夫の弟子等が主より聞きし所の言の果して信じ居りし

や否やは、彼等が一の試練に逢ひし時に明にせられたり、即四〇三十五以下は其事實を示すなり、此時彼等は主と偕に舟にありき、其時彼等が聞きし所の言は「向ふの岸に濟れ」との一言にてありき、此は單純なる一言なり、されど如何に單純なればとて主の御口より出たる御言即ち神の言なるが故に例令向岸に達するまでに如何なる事情に逢ふとも、決して言の力の消滅せざるに信を措きて彼等は心を安んじ居るべきにあらずや、然るに一朝劇浪暴風の舟を覆さんとするに逢ふや、彼等は忽ち御言に對して信なき事を現示し、甚しく懼れたり、是故に主は「爾曹何を信なき乎」と曰ひたまへり、彼等は主の弟子なりしが故に己が心にては、よもや信なき者とは思ひ居らざりしならん、よし、信仰の薄き事をば感じたる事ありつらんも、丸で信なきとは思はざりしならん、されど彼等は主より己が信なき事を明にせられたり、我等も亦彼等の如く、己自ら信仰ある者の如く思ひ、又人より信仰ありと譽められたる事ありしを以て我は確に信ある者とのみ思ひて安んじ居らば、却て實際の試練に遭はん時に全く信なき人とならん、夫の小舟の中を見よ、弟子等は事情に對して大膽なく又信なき

く、彼等の心中唯だ舟の沈まん事を心配するの外又何もあらざるなり、されど幸なる事は主が彼等と共にいたしましたまひし事にてありき、彼等は己が不信の醜を主の前に現はしたりと雖も主は主にいまして彼等の如何に由て御心を變へたまはされば、唯だ御親の思召を以て彼等を愛したまひたり、我等又之を思ふべし、主が弟子等を舟に乗せて向岸に濟らんと曰ひたまひし所以のものは彼等を事情の中に苦めん事其目的にあらずして、かのガダラに居る悪鬼に憑れたる一人を醫さんが爲にわざく舟に乗じて往きたまひし事を、されど彼が夫の地に到りたまふは悪鬼に憑れたる者が請願せし故にあらずして主は唯だ御親の御思召を以て出で行きたまひしなり、嗚呼彼の御心は如何に恵と愛とに充てる哉、以上の事情に反して六〇四十五の場合に於ては主は弟子等と共にいまさいりしが故に此時に當て彼等の學ぶべき事は唯だ主の御心を信用する事にてありき、

五〇三十五以下に於て會堂の宰の家人等既に女の死にたるを見、最早師を煩はすの必要なしとして主の來たまふことを斷はりぬ、此は彼等の心、主イエスに於ても既に死

にし者は甦らし得る事能はざるべしと断定し居りたるに由る、かく彼等は不信極まる言を以て主の前に來りたり、されど主は之を聞きて怒りたまはざるのみか、却て「懼るゝ勿れたい信せよ」と仰せたまひ而して往きて死者を起しめたまひたり、此事實に由て我等の學ぶべき事は、我等も亦時に己が不信の心を以て、夫の人々の如く主を謝絶せんとする者なれども、主は既に我等を御自身のものとなしたまひたれば、強て我等に教訓を與へたまふとの事なり、抑も主を崇めつゝ歩まんとする途は舊人の心に取ては尤も窮屈のものと感ずるが故に、神の言を聞きて全く従ふ事を欲まざるは舊人の有様なり、我等の舊人は神が自由に己を使用したまへば却て喜樂を失ふ事多きが故に寧ろ己の心に適ふ程に主を崇めて彼に事へ幾分の證を擔ひて歩む方苦みも少くしていと可らんと思ふ者なれども、此思想は確にサタンの欺より來りし所の者と知らざる可らず、試に五〇一以下に於る悪鬼に憑れ居る人の有様を見よ、惡魔が自由に人を使用し居る其有様如何に憫なる者にあらずや、誰か此様を見て幸なりと云ふ者あらん、さらば例も窮屈なりども、我等が神に使用せらるゝの幸は又他に類ひなき者



と知らざる可らず、人は皆性質に於て悪魔の心を有するが故に神に自由に使用せらるゝ事を恐れて却て心配する者なれども、唯だ一切を神に委ぬる事は尤も必要にして又幸なる事なり、悪魔の旨の如何なるかは己に可五〇一以下に於て明に示されたるが、人間の旨の如何なるかは路二十三〇二十五に於て現はされたり、人間の悪き旨は主を十字架に釘る事に由て全く成就せり、此故に路二十二〇五十三に於て其時は即ち「爾曹の時且黑暗の勢なり」と云現はされたり、されと思ふべし、罪人の旨の全く成就せし所に於て神の御旨も亦其所に於て全く成就せし事を、嗚呼如何に奇しき事なる哉。

既に讀たる可五〇三十五と同六〇四十五以下とに於る二箇の場合、孰れも主を信ずる事をせざりし事を示すと雖も、主は彼等の如何に由て變る御方にあらざるが故に前者に對しては彼等が斷るにかゝはらず、強て往きたまひ、後者に對しては弟子等が只だ風波を恐れて思煩ひ居る時に、彼等の爲に祈りたまひき、かく如何なる事情も主が御心の愛を空くする事能はざるなり、

哥後三〇十七に主の靈ある所に自由ありと記さる、特に**主**といふ字のあるに注意すべし、聖靈は常にイエスを主と言現はしたまふ、而して其所には誠の自由はあるなり、之に反し己を主とする所は即ち我儘の行はれ居る所と知るべし我等は我儘を行ふ事を以て誠の自由を得たる者の如く思ふと雖も、此は自由にあらずして却て奴隷たる者なり、約八〇三十二―三三を見よ、我等は性にしてアダムの子なれば、其心の自然は恣に日を送る事を好み又我儘より來る偽の自由を喜ぶ者なれども、しかせずして常に神の御前の誠の自由を喜び居らば幸なり」我等は常に主のみ必要な事を知り居らざる可らず、夫の可六〇四十五に於る弟子等、若し己が主と離れて舟に乗りし事を知りぬたらんには、たとへ如何なる事情に逢ふも其中に於て主の來りて助けたまふ事をのみ待つべきなり、何となれば主は恵あり力あり能く彼等を助け得る御方なればなり、而して此經驗は曠野に於ても同様なり、曠野は元來水なき乾きたる所なれば極めて不自由なるは申すに及ばず、されど若し主其所にいますは如何にぞや、彼は豊に糧を與へ得る御方なれば、彼のいます所は曠野にあらずして、凡ての物の滿る

所となるなり、恰も可六〇四十二以下の如し、さらば我等は如何なる時にも單に主御自身の必要なる事を知り居らば誠に幸なり、

既に讀たる四〇三十五一と同六〇四十五一との二箇の場合を相比して、我等は前者に於ては我等が主の言に信を措き如何なる事情も神の言に勝ちがたければ必ず向岸に到着し得べしと確信して心を安んじ居る事の大切なるを學び、後者に於ては主が我等を愛するが故に我等を事情の中に苦ましむるを好まず必ず來り助けて「心を安んせよ」と宣ふ其御心の程を知ることの大切なるを學ぶなり、之を要するに一は主の御旨のあるところを知らずして心配し、一は主の愛を知らざるが故に懼れたる者といふべし、されど我等は羅十二〇二の如く全く且つ善にして喜ぶべき彼の旨を知り又約第一卷四〇十六の如く彼の愛を知りて信じ居らば誠に幸なり、彼は善事の外何事をも我等に來らしめたまはざるなり、

第三日

○讚美歌第百十番 ○詩篇八十一篇九、十節殊に十節の末節を朗讀 ○民數記六

章二十二節至終、出埃及記二十章二十四節朗讀 ○詩篇十六篇十一節朗讀 ○讚

美歌百三十一番 ○哥林多後書九章十五節朗讀

○路加傳十五章二十三、二十四節

「肥たる犢を牽來りて宰れ我等食して樂まん、是わが子死て復生うしなひて復得たればなりとて彼等と共に樂み始む」と、我等宜しく此放蕩息子に就て思ふべし、彼一朝父の家を離れ遠國へ旅立するや、其所にて一大饑饉に出逢ひたり、時に彼は已が身を安んずるの家なく、又其腹を満さんが爲の糧もなかりしが故に彼は實に身心二つながら極めて飢たる所の者にてありき、是に於てか彼は父の家の豊なるを思ひ起し、最早己を飽しめ、樂しましむる物、又他にあらざるを悟りたれば、彼は己が罪を認はして、父の家に歸り來れり、彼父の家に歸り來るや、父は彼を憫み趨往きて其頸を抱きて接吻したるのみならず、彼が爲に備へ置きたる美服を衣せて彼を家に受入れぬ、加之、父は彼の爲に特に肥たる一犢を宰りて彼に與へたり、されど此一犢は單にか

の季子が一人の食物にあらすして父と子等との共に食して楽しむ所のものにてありしを思ふべし、此故に「我等食して樂まん」とは記されたるなり、嗚呼季子が當時の心の満足と喜樂とは果して如何にぞや、

我等も亦恰も夫の季子の如く、曩には神より遠く離れゐたる者なりしも、神は既に主イエスの御業を喜び、満足して彼を受入れたまひたれば、我等も今は彼に由て父の家に受入れられたる者となれり、此故に我等が現時の食物は最早かの豕の殘食にあらすして、父が季子の爲に宰りたる肥し一犢の如く、即ち我等の爲に十字架の上にて宰られたまひし、主イエス御自身にてあるなり、而して此主イエスは父が永遠の御喜にてあるが如く、又我等の喜ぶべき御方なれば、我等も亦かの季子の如く、同じ御方を父と共に嘗ひて喜び楽しむの幸なる特權を有つを得たり、思ひ見よ我等が既往の有様の如何に憫なりしかを、我等は實に豆莢を以て己が腹を充さんと思ふ程までに零落したる者なれば、其時我等の心狀はに瘵せ衰へて又一の喜樂とてはなき所の者にてありしなり、然に今は之に反して肥たる犢を食し、嘗て知る事を得ざりし所の喜樂を父と共に嘗

ふを得るに至れり、嗚呼此懸隔は如何に大ならずや、而して我等が今主イエスを嘗ひて楽しむ事は即ち死にて復生たる靈魂の糧にして我等が肉を喜ばしむる所の物にてあらざるを知らん事を要す、世には肉慾を満し得る所の食物、甚だ乏しからずと雖も、靈魂の必需を充す物に至ては又一のある物なし、往昔夫のイスラエル人曠野の旅途にあるや、彼等はエジプトの事情を想起して己が肉慾を充されん事をエホバに叫ひし事ありたり、其時エホバは彼等の願にかなへて彼等が飽き足る計に多くの物を與へたまひしかども、此事情は果して彼等の肉を満し得たる如く、彼等の靈魂を肥すことを得たるか、否々、「エホバは彼等の願欲をかなへたまひしかども其靈魂をやせしめたまへり」(詩百六〇十五)とあれば、却て此時彼等の靈狀は極めて惘然たる者にてありしや推知し得べし、又世には「肥ふととりて其目とびらで心の欲にまさりて物を得るなり」(詩七十二〇七)との如く、己が心の儘に多くの滋味を食して其身体を肥滿せしむるの自由を持つ者なきにあらずと雖も、彼等は只だ其身体肥ふと居るのみにて、其靈狀の瘵衰へて憫れなるは恰も夫の季子が放蕩時の有様と毫も異なる事なし、夫れかくの

如く世には最早我等が靈魂を満し得る所の物一として之れなき事明かなれば、肥たる物と完全なる喜樂とは只父の家にのみあるものと知り得べし、さればこそ夫の季子も父の設けし筈にはべりて満足し且つ喜びたるなれ、我又約六〇三十二を讀みて、其所に「神のパン」てふ言のあるに注意せり、神のパンは又我等が食する所のパンにして即ち生を與へんとて天より降りし御方主イエス御自身を云ふ、如此我等は父と一の糧を食して喜び樂むの特權を有つ嗚呼此は如何に幸なる事ならずや、

次で其二十四節を見よ、「彼等と共に樂み初む」と我等が設けられたる愛の筈にはべりて、肥たる糧を食し父と共に樂むの喜樂は、我等か愛入れられし日に初りたるが故に「樂み初む」とは記されたるも、其終に付ては更に記されあらざるなり、之に由て見れば我等が此喜樂を味ふ事はたゞ現時或は集められたる時のみにあらず永遠に涉りて更に變らざるものなるを知り得るなり、嗚呼我等の爲に自ら宰られたまひし主イエス御自身を嘗ひ職の喜樂豈大ならずや、御言に曰く「我等嘗ひて主を惠ある者と知りたらんには云々」(彼前二〇三)と、我等が主の惠や愛を識て喜ぶ、之れ素より幸なる

事に相違なきも、主御自身を嘗ひて喜ぶ事は尙之にせされるの幸なり「汝の前には充てる喜びあり、汝の右にはもろくの快樂とこしへにあり」(詩十六〇十一)とは宜なる哉、

○讚美歌第八十四番

○路加傳十二章一至十二節

此處にて主は懼るゝに足らざる事と、懼るべき事とを教へたまへり、人間は之を間違へ居りて懼るべき神を懼れぬゆる偽善を爲すなり(其一、二節)扱、偽善といふ事は實に神に失敬なる事なり、また愚なる事なり、パリサイの人は「外を造りし者は又内をも造り」しことを知らず、人の目に清く見ゆるやうに骨折りて心の内は貪慾と惡にて充てり(路十一〇卅九、四十)神は心の中を見たまふ御方なれば此の神の目に清く見する事は爲し得ざるなり、神は光にましませば物を照らし現はしたまふ、我等若し心を以て神の前に歩まずば、神は何日か其偽善を人の前に現はして公然之を耻かし

めたせふべし、又人は目に見ぬ神を懼れずして目に見ゆる人間を懼るゝ者なり是は甚だ愚なる事なり、人間はよし我を殺すことあるも、それぎりにてお仕舞なり、されど神は殺したる後に地獄に投げ入るゝ權威を有つ御方なり、「但し信者はキリストの御血にて贖はれたる者なれば決して神の刑罰を蒙ることなしと雖も神の權威を思ひて神を畏れ奉るべきは當然の事なり、神は恩寵の神にまします故、我等神を畏れずして可さか、神を慢るは人間の性質にして、我等の新しい性質は神を畏るゝ性質なり、主イエスは神を畏るゝことを以て樂みとなしたまへり、(賽十一〇三)我等の舊人は如何に力むるとも人を懼るゝ者なり、事なき時には主に忠義に事へんと思ひ居りても事に出逢ひて下女さへも懼れたるはペテロなり(路廿二〇三十三、五十七)彼は自然に自己の損得を考ふるが故に主を知らずといふなり、彼は主が驢駒に乗りて王として城市に入りたまふ時に主を知らずといはざりき、我等彼と同じ性質ある事を知りて己を恃まずして主に依頼せば福なり、但し我等は弱しと雖も神が我等の味方にまします故人間も事情も懼るゝに足らざるなり、「懼るゝ勿れ」といひたまひしは我等に力あるが故にあらず、神が我等の髪の毛の數さへも知りたまふが故なり、雀の如き價安き者にて神は尙ほ心附けたまふ、況して多くの雀よりもまさされる我等をや、我等は損得を思ひて主を言現はす事を恐るゝ者なり、主に忠義に歩まば損となるなり、(提後三〇十二)されど、神は我等の味方にまします故我等人より損を受るも神より得を受く是れ實に信者の特權なり、イストラエルは天地を造りたまへる神に依頼みたるが、我等は更に能く神を知りて羅八〇卅一の如く曰ふ事を得、神の愛は十字架にて全く顯はれたり(羅五〇八)此の愛の神を信用して勇み進む事福なり、

○詩篇二十三篇五節及び黙示録三章十一節

我等は今かの放蕩息子が父の家に受入れし時に父が彼に與ふるに管に美服を以てしたるのみならず、特に肥たる轎を宰りて彼に食せしめたる純粹の恩に付て教へられしが、我等も亦彼の如く今は純粹なる恩に由て父の筵に坐する者となりたれば、最早かの季子が放蕩時の如く豆莢を食して悲嘆しみつゝ日を送る者にあらずして、父と共に

一つ物を食して喜樂に滿され居る所の者なり、されど此喜樂を知らざるの世人は我等が此世に屬ける一切の喜樂より離らせられたるを見て、却て信者には悲哀多きもの、如く思ひ居れり、然り彼等が如此思ふは素より無理ならぬ事なれども、既に信せしといふ者にして尙ほ且かゝる思想を抱きて、己が一切を捨て、主に従ふ事は却て以前に比して喜樂の減するが如く感じ又信者となりし後にも尙ほ幾分の世界的喜樂を以て其喜樂を補助せざるを得ざるが如く思ふ者なきにあらず、是れ我等が心の性質は矢張不信者の時の心と毫も變り居らざるに因る、されど我等は此惡心に欺かれて眞誠の喜樂を失ひ再び豆莢的の喜樂を慕ふに至らざらん様注意せざるべからず、傳道書に曰く「死し廻は和香者の膏を臭くす」と、廻はいと小さき蟲なれども、善物に付く時には忽ち其全体を感くするが如く、我等の中より來る罪も、たとへ如何程小さければとて、之を等閑に附し、無頓着に打捨て置く時には其全体を汚すに至るなり、我等の性質は兎角罪の大小を論じて自ら小さしと見認る事には餘り心を用ひざる傾あれども、此弊害は恰も少しの麪酵の全体を發らす如く、甚だ恐るべきの結果を醸すに至る者なり

此故に罪は罪として何所までも審かさるべからず、かのアダムを見よ、彼が始に神の言を聞きし時に之を捨る事あまり大なる罪を醸すとは思ひ居らざりしならん、されど彼がそれを捨たるの結果は如何にぞや、引て今日の如く多くの罪人を造り出し、にあらずや、さらば罪は如何に小さければとて決して之を無頓着に打捨て置くべからず、「なんぢわが仇の前に我爲に筵を設けわが首にあぶらをそゞぎたまふ、わが杯はあふるゝなり」(詩二十三〇五)と、わが仇如何に強くとも神は我等が爲に彼の前に筵を設けたまひたれば、我等は如何なる時にも此筵に坐して喜び居る事を得、嗚呼此恩は如何に奇しき事なる哉、己に云へる如く我等は眞誠の喜樂を與へられ居るが故に、如何なる境遇にあるも常に喜に溢れ居る事を得べし、然るにサタンは却て我等の心を感はして信者は疲たる憐なる心を以て悲みと共に歩まざるを得ざる者の如く思はしめて、既に與へられたるの喜樂を損じ又之を奪ひ去らんと務め居り之れ彼が詭計なり、此故に夫のアダムもサタンが巧なる言を以て已れ神よりも尙まさりて能く彼を脱し得るが如く告げし時に彼は其言に欺かれて先に神より與へられしものを奪ひ取られたる

なり、(創三二〇)

富る兄弟は已が境遇の繁雜なるを煩ひ、貧しき兄弟の閑散なるを見て、我若し彼の如くんばさぞや恩を味ふに妨げなからんものと思ひ又貧しき兄弟は已が豊饒ならざる境遇にあるを嘆じ、我若し彼の如く富る者ならんには常に主を喜ぶの自由あらんものを、如此孰れも、己が境遇より論じて、不足を感ずるが如き事あらんも、神は我等が境遇の如何によらず、常に眷みて同様の恩を與へたまひつゝあれば我等は如何なる場合に於ても、彼を以て満足し且喜び居らば幸なり、我等の心はサタンの理屈を賛成し易き傾きあるが故に若し信仰と神の言とを保ちて己が心を守り居らざれば忽ち彼の術中に陥るに至らん、恰もかのアダムの理屈的の言を信じて神の恩に尙は不足あるが如く思ひて彼の欺に陥りたるが如し、我等の心は常に不足を感じて何かを羨望つゝあるを免れざるが故に、サタンは之に乗じて我等を誘ひ我等を感はず事を爲す、されど我等の心を満足せしむるものは唯主御自身と其富との外何もあらざる筈なれば「神を敬ひて足る事を知るは大なる利なり」(提前六〇六)「汝等世を過るに貪る事をせず、有どころを以て足りとせよ、蓋我なんぢを去らず、更に汝を棄てじと云ひたまひたればなり」(來十二〇五)との御言を信じて彼に在て歩まば幸なり、

世の人が擧りてサタンの云ふ處を賛成する事、素より怪むべきにあらざれども、神の救を蒙りし者にして尙且つ此事を爲す者ならにあらす 卽申命一〇二十六二十七に於るイスラエル人民の如し、彼等は「エホバ我等を惡むが故に云々」と云ひし言は彼等の心、サタンが偽に欺かれ又已れ其云ふ所を賛成し居りたる事を示したり、如此我等の心若し暗くならば更に善惡を辨へ得る事能はざるまでに至るものなり(耶四十四〇十七を參見せよ)、我等は時に仇の設けし事情に遭遇ふ事を免るゝ能はざる者なりと雖も、我等は其事情の爲に喜樂を失ふ事を以て當然のものと思ふ可らず、素より仇は我等よりも強きが故に其事情も亦困難なる事多からん、されど我等の味方なる神は彼の前に我等の爲に筵を設けたまひたるのみならず、其筵には己に肥たる懐の宰られたるあるが故に我等はたゞ其席に於て、それを食して自由に喜び樂まば善し、嗚呼此は如何に幸なる我等の特權なる哉

主は「我必ず速に來らん爾が有どころの者を堅く保ちて爾の冤を人に奪はるゝ事勿れ」と（黙三〇五）宣へり、サタンは實に我等が有つどころの者を奪はんとして熱心なるも主は我等を助け且守りたまふ御方なれば我等は彼を信じて一切を彼に託して安んじ居らば誠に幸なり、提後一〇十二に曰く「……我わが信する者を知りかつ我かれに託したる者を彼かの日に至るまで守ることを爲得るを信すればなり」と、世人は主を知らざるが故に又一切を託すべき者を知らず、されど、我等は主を信じ且つ知るが故に萬事を彼に託するの幸を凡ての経験に於て味はしめらるゝなり、提後四〇七を見よ、夫のバツロは已が一切を託せし御方を失はざるを知れり、彼は實に信する事を守りて其生涯を通過せり、我等何を携へされば又何をも失ふの憂なきが如く、主の愛を信じ一切を彼に託して歩まば其安全如何ばかりぞや、

○讚美歌第六十二番

馬可傳之講讚

可七章三十一節以下に就て 先づ可八〇十七至二十一節を朗讀す、  
 弟子等は常に主と偕にありし者なれば彼等は御言を聞く耳あるべき筈なるに、却て彼等は聞けども辨へず、且悟らざる者となれり、如此自ら耳ありと思ふ者は耳なき者となり、實際に耳を失ひわたるかの聲は却て聞ゆる者となれり（可七〇廿二）是れ即ち主の工なり、主は凡て入用ある人の入用を充し得る御方なれば、病者の醫を要するが如く、彼に求める者は幸なり、此故に耳を要せし人は聞く事を得て喜び之を要せざりし人は却て聞く事を得ずして主の前を立去らざるを得ざりしなり、「弟子等主と偕に在りし時屢ば信仰を試らるゝ事情に出逢ひしが其都度彼等は失敗を免れ得ざりし、是は彼等が已の如何なる者なるかを知らざると又主に依頼し事をせざりしとに因るなり、彼等は己が眞の様を知らざるが如く、又主の眞の様をも知らざりしが故に彼等は何を自ら悟り得ざりしなり、此故に主が言を播きたまひし時に彼等は其言を聞達へて其意の何たるを辨へ得ざりしや、」

馬可傳は三章以下に於て神の御旨の行けるゝ事に付て記されたり、神は神にいまして



常に御親の力に由て其旨を行ひたまへば其御働きは神の御目に於ては明に見るべきも、人の目にて更に見る事能はず、されど開かれたる目は能く之を見る事を得るなり。」  
 主の足下は神の旨の行はるゝ處なり、此故に彼の足下に來りて言を聞く人々は即ち神の旨に適ふ所の人と知るべし、又神の旨が主イエスに由て行はるゝ事實は夫のガダラ地方にありし悪鬼に憑れたる一人を醫さんが爲に主がわざ／＼舟に乗りて往きたまひしに由て明かなり、されどかゝる御旨の程は當時弟子等の毫も知らざる所に於て、唯だ主御一人のみ之を知りたまふ、時に風波の起るありて、見る所に由れば其事情は向岸に達する事を妨げたるが如く見ゆしかども、此風波はたゞ弟子等を懼れしむるに止りて主の御旨を行ひたまふ事を妨げ得ざりき、其後主がヤイロの娘の病氣を醫さんとして出往きたまひし時、彼の許より來りし人々己が不信を以て主の來訪を謝絶したる事ありき、此事情も又恰もかの風波の主が御旨を行ひたまふ事を遮りしと同じきが如しと雖も、主は事情の如何に由りて御心を變たまはず、始め彼を醫さんとして出立したまひし御旨は強て之を行ひたまふ即ち彼の許に到りて彼女を起しめたま

ひたり、如此主は御親の旨を意のまゝに行ひたまふが故に何物も能く之を妨ぐる事得ざるなり、神の恵の工に始めあらば必ず又終もあるなり、されど人は誰も己が終局を知る事能はざるが故に終の事を思へば思ふ程にたい思煩ひて心配するの外なきなり、我等主を信する以前には同じく此思煩を拖き居たるも今は之に反し確なる望を懐くが故に又更に思ひ煩ふ事を要せざるなり、昨一〇六を見よ、其所には「深く信す」との言あり、我等は今神の御手に導かれつゝ歩むが故に最早何の疑ふ所なくたい堅く信する事を得るなり、此幸は如何に大ならずや、」  
 哥後五〇六に「我等の心常に剛毅」と記されたるが如く、我等は時々悲哀の事情に遭遇ふ事なきにあらざれども、主の我等に對して爲たまふ事は善の外になく又凡ての事に由て有益の教訓を與へたまふと知るが故に如何なる時にも我等の心は剛毅し、已に云へる如く神は神たるの旨を有したまへば我等が事情の如何に由て其御旨を中止したまはされば、之を信じ居る事實に幸あり、」  
 我等は時に我儘を行ふ便利を得ん爲に却て神に眷られざらん事或は識られざらん事を欲すと雖も、神は愛なる御方にいませば其愛に由て凡ての事を爲た

中ふ、此故に我等が彼に愛せられざらんとするも彼は強て我等を愛したまふ、嗚呼彼の愛は如何に大なる哉、我等之を知らば彼の愛を信じ依頼むの外なきなり、可七章に於ては人間の悪き行の根に付て記されたり、人はたゞ儀式的に由て神に近かん事を務むるも、其心は全く遠かり居るが故に其行爲は純粹の偽善と云はざるべからず、恰もかのパリサイ人の如し、かの路加傳に記されたる放蕩息子に實際悪者なりしが故に悪しき評判を人々より受けたるのみならず自ら己の悪人なる事を知りたるなり、されど人間の心はたゞ自ら己の悪者たるを知るも好評判を受くる時には其心喜び居る者なり、是れ人は偽善者たるを免れ得ざるの一證なり、されど神は人の心を見たまふが故に彼の前に於ては誰も善を偽る事能はざるなり、我等は兎角外貌を標準とし易き者なれど主は之に反して單に心を標準と爲たまふなり、夫のイスラエル人は諸國民よりも神に近かりし所の者なりしも、其心を云はば彼等は却て諸國民の如く甚だ神に遠かり居れり如此我等が主の周圍に集めらるゝ者如何に其數多ければとて、主は我等の數多きを見る御方にあらずして只だ集められたる者の心を見たまふを思ふべし、かくの如く境遇は決て神を喜ぶの基礎となるものにあらざれば、我等は境遇を變せんと企つよりも寧ろ羅十二〇二の如く、我等が心を化て新にせん事を要するなり、何となれば我等が神を喜ぶ事は境遇によらず心によればなり、さらば我等の心若し主に近からずば如何でか溢るゝの喜をもち居る事を得んや、己に云へるが如くかのパリサイ人は自ら神に近き者と思ひ又神に近くの場合を有つ者と思ひて喜びぬるも、其心は甚だ神に遠くありしが故に、彼等の爲す所の凡ての事は悉く偽善に陥りぬるにあらすや、彼等はたゞ如何程神に近き縁ある者にもせよ、若し隔てなく神の前に立つ事能はずんば彼等の喜びとする事は只表面的のものならんのみ、此轍には我等も亦甚だ陥り易し、夫の八章に於る主の弟子等も同じく此偽善に陥りたるが如し、彼等は己が常に主と偕に歩み居るといふ事を以て満足し自ら耳ある者と思ひ又何事をも能く悟り得る者と思ひたれども、此は彼等が己の心の如何なるかを知らざりしが爲にして彼等の心の如何なるかは其二十一節に於て明にせられたり、如此彼等は自ら主に近き弟子なりと思ひぬしも却て悟なき人即ち心の遠かり居たる

四十九

者にてありしなり、我等は時々有様の幸に欺かれて其心を失ひ易き者なれば我等は之に注意する事を要するなり、

可八〇二十七節以下に於ては主が言を聞けども悟らざる所の人々を恵みたまふ事に付て記されたり、而して其基礎は主の贖の業にある事を示す、三十一節以下を見るに夫のペテロは主の死にたまふ事を聞きし時にイエスを援て諫めんとせり、此時若し主が彼の諫言を容れて十字架上に死にたまはざりしならば果して如何にぞや、かのペテロも教はるゝ事を得ざりしならん、而して彼が此諫言を奉しりしは實にサタンの心より出し事を示さんが爲に主は「サタンよ我後に退け」との一言を以て彼を譴責したまひたり、抑もペテロは何故に主イエスが十字架に釘られたまふ事を聞きて之を止めんとせしぞ、之れ彼の心主の捨てられたまふと共に己も捨てられ且人々より惡まるゝ者となるを知りたればなり、主は常に我等を卑くするの途に導きたまふと雖も人は卑くせらるゝ事を好まざるが故にかのペテロも亦主を諫むるに至りしなり、我等は兄弟等と共に居る時には自ら己を卑くし且他より卑くせらるゝ事を喜ぶの様ありと雖も、世

の人の前に於ては然かせらるゝ事を決して好まざるべし、是れ人の心には執れも傲慢の性質あるが故なり、此故に詩五十一〇六に「心の衷云々」と記されたる如く、主は常に我等の心を知り、之に向つて語りたまふがゆるに實際の教訓に心を留る事は極めて大切なり、我等の心は卑くせらるゝ事を自然に耐へ得る能はざるも、主は「我は心柔和にして謙遜る者なれば云々」(太十一〇廿九)と宣ひし如く、主は我等の如く謙遜る事を學びて後に謙遜る御方にあらずして、彼は其心のまゝに謙遜たまひしなり、我等は今此御方の足跡に従ひ歩む者にして又彼は馬太二十八〇二十の如く我等に告げたまひたれば常に彼と偕に居らば極めて幸なり、

可九〇一節以下此處に於て主の榮光は現示さる、時にペテロは其輝ける有様を喜びて心を奪はれ主をのみ眺むる事を忘れたり、而して此は我等が心の自然と知らざる可らず、我等は兎角周囲の有様をのみ眺めて、其場所の幸に満足せんとする者なり、此故に一朝事情の悲むべきに逢はゞ忽ち以前の喜を失ふに至る是れ其目的とする所主にあらざるが故なり、かのペテロは輝る主の榮を見て喜びしも主が眞誠の價値は榮に於

てよりも寧ろ十字架に於て現はれしを思ふべし、而して其十字架こそ我等罪人の救はるゝ唯一無二の幸なる場所なるなれ、我等はよしや天の榮に與る事を得んも若し主が十字架の御死なかつせば如何にぞや罪人たりし我等いかでか主を喜ぶ事を得ん、可九〇三十一三十二、人々主イエスが十字架の從順を喜ばざる者なるが旨に却て彼を捨るに至りしも、此は人々より譽を受る事を喜ばず唯だ神の旨にのみ従ふ事を喜びたまふ而して神は此從順を喜びたまひたり、之に由て神と人との間に全く交りのなき事を知り得るなり、同三十三節以下を見るに弟子等の中に一問題あり、彼等互に此事を論じ合へり、時に主は其論する所の何事なるやを問ひたまひしが、彼等は默然として答ふる事をせざりき、そは彼等が論題は各自首たらんと争ひにてありたれば彼等は此問に應じて答ふる事を耻としたればなり、如此人は各自先を争ひて威張たき性質あるが故に、彼等も亦其事を論じ合ひしも、彼等は主の前に出し時に主は能く心底を照らして洞觀したまふ御方なりと知りたるが故に忽ち耻て默然たりしなり、我等も亦彼等の如く唯だ兄弟等との交際のみを標準として主の御前を感せざれば或は同様の失

敗に陥る事あらん、主は光にいませば我等が竊に話し、言も又隠し置かんとする事も盡く照して残したまはず、されど主の御心は愛の外あらざれば爲に恐を抱くよりも寧ろ自ら進んで己が心を發き出さば幸なり、かくする事に由て我等は却て安慰を蒙り且つ一層親しく交る事を得るなり、弟子等主の御死を耳にせし時彼等は爲に悲哀の情に充さるべきに却て己が榮を受ん事を語り合ひて其心の傲慢なるを表白せり、嗚呼人間の心想は如何に恐るべきものにあらずや、されど此心想は實に彼等の特有にあらずして我等も亦同一の者たるを知らざるべからず、可十〇十七以下を見るに一人の來り跪きし者あり彼は主より己が富を捨て來り従ふべき事を命せられたる時「哀愛ひて去りぬ」嗚呼人は如何に主の爲に萬事を捨る事を喜ばず又惜む者ぞや、彼は主の如何なる御方なるを知らざるが故にたゞ己が財産の外に富なるものなしと思ひそれを捨る事を惜みたるも、若し彼主の富を知りたらば如何にぞや、彼は主の富を以て満足し己が一切を忘るゝを得しならん、如此人は皆己が益となる事を喜べども己が物を捨る事は忽ち損失となる事と思ひ悲ひなり、是れ即ち

我等が性質なり、されど主イエスを見よ彼は如何に我等の爲に一切を損としたまひしぞ、彼が如何御自身の富を全く打捨てたまひし所以は貧者たる我等を富しめんが爲にてあれば彼に従ふ者は天の財寶を以て富しめらるゝ者なるが故、たとへ己が一切を損するども貧者となりしにはあらず、却て富る者となりしなり、されど此富を知らざるかの富る人は己が財を捨る事を惜みたりき、之に反してかのパウロを見よ、彼は己キリストを職るを以て最も益れる事としたるが故に、爲に己に屬する一切を糞土視して捨る事を得たるなり、」 富る人の憂ひ去り往くを見しかのペテロは曰く「我等一切を捨て爾に従へり」と(可十〇二十八)彼は己をか富人に比して我は一切を捨てしが故に確に天國に入る者なりとの誇心を以てかくは言現はせしなり、人は如何に自らを高むる事の自然なる者ぞ、」 次で記されたる者は四十六節以下に於る路傍食を乞ひわたる一人の盲者なり、彼主の呼びたまふと云ふを聞くや、忽ち彼が自らの富とする一領の蓋縷を惜氣もなく打捨て來り、之れ彼の心主を見んとする思に充されたるが故ならずんばあらず、此故に彼の目瞭になりて面前主イエスを見奉るに至るや、己が勝手の途に往くを好まず、イエスに従ひて路を往けり、是れ彼が主イエスを見たる自然の喜悅のあらはれたる者と云はざる可らず、

以上讀來りし事に由て我等の教へらるゝ事は我等が主と共に居る時には必ず彼の光に偽善の心は照らされて其眞想を發露さるゝてふ事なり、我等は己が心に欺かれて我等は以前よりも幾分か善人になりたるが如く思ふと雖も、之は己が心と親しく相成る証據にて、此種の成長は甚だ不幸の結果を招くに至る者なり、我等の心は自然に光を惡む傾きあるが故に實際照らさるゝ事に由て心の安慰とならざるなり、何となれば己が心想を照らさるれば唯だ惡の外あらざれば又其心と親しく相交る事を得ざるが故なり、如此我等は照らさるゝ事を好まざるが故に兄弟の前にも己が心底を盡く打明けて發き出す能はざるも、主の愛は兄弟のとは全く異れば心より親しく主と交りて其心底を彼の前に發き出さば幸なり、我等は眞には主を惡みて十字架に釘し者にて我等の惡は最早此上に騰りがたし、然に主はかゝる者と知りて贖ひ且つ恵みたまひしが故に、我等は唯だ彼の愛を信じ常に彼と親しく相交らば幸なり、嗚呼神の途は如何に

深遠にして且つ奇しき哉、人誰も之を知る事能はず、されど我等は十字架に由て之を味ひ知る事を得るなり、約百記二十八〇七、八、十一、羅馬十一〇三十三卅四、一卅六

○腓立比書第四章

神の御言は之を讀みて主の御前に神の御言を信じ之を嘗へば嘗ふほど福なり、神はその御言を幾度も我等の靈に應じて嘗はしめたまふ、ゆるに同じ言を幾度にも心して讀み又思ふことは糧となり喜びとなるなり、扱、此三節に福音に於て同じく勤勞せし人々の事をいひ又彼等の名は生命の書に記されありといへり、福音の爲に勤勞するは福なる特權なり、されども其名を生命の書に録されたるは是よりも更に大なる理由あり、既に生命の書に其名を録されあるものなればこそ喜て福音の爲にも勤勞するを得ると知りて我等の心よろこぶなれ、路十章に「爾曹の名の天に録されしをよろこぶべし」と主さとしたまへること味ふべし、弟子等は元來狼の中に居る羔の如きものゆる極めて弱きものなり、たどひ惡鬼が彼等に服したるも若し已れの如何なるか

を忘れて其働きの果をよろこば、直に失敗に陥る外なかるべし、我等は恒に其上るこびに欺かれて其上るこぶ所以の眞の基礎を忘れやすし、もとより惡鬼さへも主の御名に因て弟子等に服せるに相違なきも、弟子等は惡鬼の服せるを以て喜びとすることなく、其名の天に録されたるを喜びとすべき也、而して其名の天に録されたる所以は何ぞや、これ神の羔にいます主イエスが我等の罪の爲に十字架上無限の苦難を受けて御血をながし我等の爲に永遠の贖ひを成就したまへる此基礎によるにあらずや、我等は神の光に照らされて已の如何なるかを學びしが、そはキリストの御血によりて神に和さ神の愛の中によろこぶなり、我等の名を天に録されしをよろこぶ喜は永遠にして誰も奪ふものあることなし、黙十三〇八にある通り地に住む人即ち世の始より殺されたまひし羔の生命の書に其名を録されざるものどもはかの獸を拜するに至らん、されど我等は神の御言により羔の御贖ひにあづかりしものにて天に其名を録されたるものなり、即ち羔の生命の冊に其名を録されたる者なり、是故に純粹なる恩によりて永遠に主イエスと偕に分を同くし恒に主をよろこぶを得、あゝ此福は如何ばかり

どや、かゝるが故に我等は今恩に感じて各々分量にしたがひ主に事ふることも出来又福音に交ることも出来るなり、路加傳八〇一―三を讀めば腓四〇三にある福音に同じく勤めし人々の如く主に従ひて歩みしもの其所有をもて主に事へしものを見る、されど彼等のかく偕に従ひし事も主に事へし事も或は病を醫され或は惡鬼を逐出されしが如き皆主の御恩にうるはひたる結果ならざるはなし、詩五五〇八一―十四を見れば世界と其中に充つるものは皆主のものなり、何物を人より取りたまはんや、たい恩に感じて献ぐる感謝のそなへものをこそ受けたまふなれ、此非立比書は罪の問題に付ては書かず全くクリスチャンの有てる新しき生命の經驗に付て録し其福なる交りに付て記したり、而して彼等が使徒をおもひし愛のあらはしは即一神の享けたまふところ悦びたまふところ」のものにてありし事をまことに福なる、

又本章五節の如く主の近きを知りて衆人に寛容を示すは善し、但し事にあたりて二つの區別大切なるべし即ち何事にかゝはらず其事たい自分に關するものなるや、又は主の御はまれに關するや如何と考ふべきなり、パウロは羅馬人にして立派なる身分あり、屬國賤民の如き取扱ひを受くべきものにあらす、されど使徒行傳十六〇三十七以下及二十二〇二十五―二十九の場合に於てパウロは敢て己が權利を主張して地方官又は千夫長の不當の取扱を訴ふるが如き事をせず彼等に其寛容を示したり、是れ自分の身に關する事なればなり、之に反して使十三〇六一―十二の場合の如きはパウロ嚴しくかの偽預言者を責め聖靈の力によりて彼を罰したり、是れ主の御はまれに關することなればなり、讀むべき主イエスの御歩みを見るときも此區別あるを明かに知る、

路九〇五十二―五十六の事は如何に寛容温良にましますぞ、されど約翰二〇三十一―十七の事は如何に熱心嚴正にましますぞ、是れ前者は御自身の事に關し、後者は父の御榮光に關すればなり、此區別を明かにして其御跡に歩むを得ば福なり、

腓四〇六節何事も思ひ煩ふことなく唯毎事に祈禱をし懇求をし且感謝して己が求むるところを神に告ぐるを得るは福なり、我等は事の大小、場合の難易によりて、かゝる事は祈るべく又かゝる事は祈るべからずと區別するの必要なした何事にても自分で思ひ煩ふ代りに毎事に祈り毎事に神に申上ることは善し、神は我等を眷みねんぞる

に我等を思ひたまふ御方にましく、我等の首の髪さへもかぞへたまへば如何なる小  
 き事とても又如何なる大なる事も神に申上ぐるこの出来ぬ事なし、かやうの事はど  
 ためらふ程の事にて自分でも思煩はんよりは祈りて神に告ぐべき也。されば同七  
 節の如く神の平安は我等の心をキリストに由て守りたまふべし、撒母前一〇二十一十  
 六節にかのハンナは誰に向て心のねがひを告げしや、かれはエホバのみまへに其心を  
 打あかせり、たゞひ祭司エリが之を知らずして酔たるものと誤認せしにかゝはらず、  
 神はよく其心のほどを知りたまふ故にハンナは充分信用して疑ひなく心を打あけて  
 悉く神に告ぐることを爲したり、同八節を見ればかの最愛なる良人すら尙は慰むる  
 能はざりしとき彼は神によりて慰を得、平安を得たり(同十七、十八節)今は我等  
 の爲に神の御前にあらはれたまふ祭司の長たる御方は誤認せるエリの類にあらず、我  
 等の荏弱をかみひやる能はざる祭司の長は我等にあらざるなり、實に主イエス一個の  
 人として此地上に歩みたまひ罪のなきことのみ我等の性質と全く區別こそあれ其他の  
 事は我等の如く試みられたまはざる事一つもなし、彼は悲喜の人にしてなやみを知り

備さに辛苦を嘗めたまへり、或は飢或は疲或は歎或は涙を流したまへり、彼は  
 我等の荏弱をかみひやりたまふ、實に「死てよみがへり神の右に在りて我等の爲に懇  
 禱したまふはキリストにましますなり」來四〇十四一十六節の「されば」「故に」「是  
 故に」等の字に着眼すべし、同章十二、十三兩節は神の言の能力を示し兩亦の劔より  
 も鋭き神の御言葉は我等の筋筋骨髓までも刺し割ちてすべてを悉くあらはし、少し  
 も隠ること能はざらしむ、此度馬可傳を讀むことによりて學ばされしが如く、我等は  
 己の如何なるかを示めされ、己の全くためなる事を學ばされたり、されど是と同時に  
 主の如何なる御方にましますかを學びて慰められ心に言盡しがたき喜びを得、われら  
 は今己の如何なるかを露はさるゝときアダムの如く逃げ隠るものにあらず、益す主に  
 よりたのみ恩寵の御座に来るの外なきなり、かく我等の實際の有様が悉く光に照ら  
 され、とき我等信する者が新しき生命に歩み得るやう我等の爲に懇求したまふ祭司の  
 長あり、是故に我等が矜恤を受け機に合ふ助けとなる恩恵を受けん爲に憚からずして  
 恩寵の座に来ることを得、實に此曠野の旅路を歩むに當り我等にとりて最も必要なる



は機に合ふ助けとなる恩恵なり、昨日は昨日、今日は今日と機に合ふ助けを要す、此の場合にはこのやうに、彼の場合にはかのやうに、悉く機に合ふ助けを要する、而して我等は憚からずして即ち疑はず恐れず大膽に恩寵の座に來りて毎事に祈るを得るが故に福なりと謂ふべし（詩六十二〇八）

昧四〇八、九節に於てすべての善事をおもふの福を學ぶ、愛は人の惡を念はず凡て善きことをおもふは心の糧となるなり、且平安の神偕に在したまふべし、こゝにまた希伯來書によりて思ひ出せるは神はキリストの御贖ひのゆゑに信するもの、罪と惡とを復其心にとめたまはされども（來十〇十六、十七）信するものが聖徒に事ふる其功勞と聖名の爲にあらはし、其愛を忘るゝ不義なる御方にあらず（來六〇十）而して平安の神は我等を全く潔くし我等の全靈全生全身を守りたまふ御方なる事、聖徒の足下に於てサタンを速に碎きたまふ御方なる事又其悦びたまふ御旨をキリストによりて我等の中に成就したまふ御方にまします事を知りて感謝するなり（帖前五〇二十三、二十四、羅十六〇二十、來十三〇二十、二十一）

昨四〇十一節我等如何なる狀に在るも満足して神を敬ふこと是れ又福なる事なり（提前六〇六、來十三〇五）パウロは如何なる事情境遇の中にも主を以て満足することを學びたり、主と偕にありし弟子等にも聖靈を受くる前には主のみを以て満足せず、幾度も何か外の物を欲する心をあらはせしが（太十九〇二十七、二十〇二十、二十一、可九〇五、六）

聖靈を受けて後、聖靈に導かるゝ心はヨハ子にあれペテロにあれ皆主キリストのみを以て満足せしを我等は知る、パウロは實に主が偕に在し、主と偕にあることを以て満足したるなり、主が其永遠の分にいましキリストが其一切にましますが故に、彼れは「愛ふるに似たれども常に喜び貧しきに似たれども多くの人を富まし何も有たざるに似たれども凡てのものを有てり」と言現はすを得たりあり「キリストの愛より我等を離らせんものは誰ぞや」如何なる事情境遇のうちにあるも我等は「我等を愛しめる者によりて凡てこれらの事に勝得て餘りあり」パウロ曰く「我は我に力を予ふるキリストによりて凡ての事を爲し得るなり」と實にキリストの愛は我等を勵ましキリスト

の能力は我等を強くし如何なる時にも恒に主をよることを得しめたまふ、主を信するもの、福は如何ばかりぞや、  
 終りに本章十九、二十節にある尤も福なる聖言を讀む、聖言を信するの喜びと感謝とを言現はし且親愛なる兄弟姉妹はすべてかゝる神の御恩に委ねられてあることを知りて喜ぶなり、「夫れわが神はキリストーイエスに在る榮光に於ける御自身の富に循ひ爾曹の凡ての需用を豊かに充たしたまはん願くは我等の父なる神に世々榮あらんことをアーメン」

○讚美歌第六十四番

四 日

○馬可傳之講讀

同八章二十二節至二十六節に就て

既に十八節以下に於て目ある者が却て盲者にてありし事を學びたり、されど主は主に

いまして盲者に目を與へんが爲に來りたまひしが故にたとへ弟子等の目見る事能はざるも、彼は我等の靈に目を與へて御自身の貴さを見しめたまふなり、弟子等は常に主と偕に居りしが故に主の行爲を見て主の貴さを知りぬたらんも（太十三〇十六）彼等は已が心の目の全く開かれざる前には常に主の言の意味を取違へ居たりき、されど彼等の目明かになりし時に彼等は先に見たる主の行爲を思出して味ひたり、即約十三〇七の如し、後にて彼等は十字架の意味を明に知れり、彼等は己が足を洗はれたる事實を思ひ出して彼の恵に由て慰められたるならん、  
 八〇二十二以下を見るに人々盲者を伴ひ來りて彼に手を按たまはん事を求めたり、是れ彼等の心主若し手を按くるにあらずば醫す事能はざるべしと思ひぬたるが爲なるべし、されど主は主にいませば人間の旨に従ひて醫す事能はざるなり、此故に我等は常に主の旨と我等の旨との全く相反するを學ぶ事を要するなり、我等の旨は常に行はれざる事多しと雖も、主の旨は常に我等の旨にまさりて現はるゝが故に彼の旨は實に頌べきなり、夫の盲者を伴ひ來りし人々は彼の醫されん事を請願ひしも、彼等の云ふ所

は寧ろ主に手を按くる事を命じたる者と云はざる可らず、されど主は人より教へられ  
 て働きたまふ御方にあらず只だ御旨のまゝに事を爲したまふなり、羅八〇二十六の如  
 く我等は祈るべき所を知らざる者なれども、後に彼の旨のありし所を知りて益とな  
 るは同二十八節に記されたるが如し、此故に我等は常に神の愛を基礎として己の願を  
 決して基礎とせざらん事を要す、又我等は神を教へて己の心の儘に彼を用ゆる事能はざ  
 ればたい彼の御旨にのみ委ぬる事尤も必要なり、かの盲者の願ひは唯だ手を按けたま  
 はん事をどのみにてありしも、主は常に我等の願に超たる恵を興ふる御方なるが故に  
 却て彼の手を執て導き出したまひたり、彼に手を執られて導かるゝ者は幸なり、我等  
 見ゆるも、主は目明かにいませば彼が我等を導きたまふ時には必ず御自身の善とす  
 る所に伴ひ往きたまへば我等はたい彼の導に委して又何の思ひ煩ふ事を要せざるなり  
 『われ汝の手をとり汝を守り』(賽四十二〇六)との如く我等は主の手に導かるゝ時に  
 はいと近く彼と共に歩み居る者なり、而して同章十六、十八、十九、節に於ては僕は  
 自ら歩む爲に目を要せず唯だ神の目を要する事と又神の導きたまふ途を見る目を我等

が要する事とを教へらるゝ、さらば我等は自ら前途を見通すの明を要せず、たい彼の手  
 に導かれつゝ歩む事のみ尤も必要なり、民數記十〇三十一を見るに當時民は人に向ひ  
 て「願くは我等の目となれ」といひてエホバを輕んじ奉りたれども、エホバは同三  
 十三節の如く彼等に先たち往きて彼等の休息所を尋ね求められたまへり、如此主は常に  
 我等を導き自ら善と見たまふ所に我等を伴ひ往きたまふが故に我等は彼を信じて依頼  
 み居らば極めて善し、我等若し彼に手を執らるゝ事なく、唯だ從ひて歩むのみならば  
 如何にぞや、必ず一つの事に出逢ひなば忽ち墮き倒るゝならん、されど主は目明かに  
 います上に我等の手を執りたまへば彼は決して我等を倒さず又曲れる小路に導きたまは  
 ざるなり、主が夫の瞽者の目をあくるに唾を以てしたまひし事を思ふべし、抑も唾す  
 るといふ事は人を辱しむる仕方にして恰も民十二〇十四に「彼父の面に唾する事あり  
 てすら彼は七日間差をるべきにあらずや」とあるが如し、されど我等の目の開かざる  
 爲には此唾は尤も必要となるなり何となれば弟子等は自ら已が盲者たるを知らざる  
 が故に却て肉の目の辱めらるゝ事に由て己の如何なるを知らしめらるればなり、人

は誰も自らの辱めらるゝ事を好まざるが故に主の前に来るを嫌ふと雖も、我等は主より辱めらるゝ事に由て却て彼の恵を一層深く味ふを得るが故に幸なり、されど我等は只自己のためなる事をのみ知らせられたればとて之に由て尙ほ物を瞭に見る事能はず、此故に主は更に両手を瞽者に接けたまひたり、是に於てか彼の目は全く癒て凡て物をあきらかに視るを得たり、

可十〇五十二節に於ける盲者を見よ、彼は目開かれて明になるや、彼は何を眺めずたい主イエスを見又彼に従ひて途を往けり、彼は當時路傍食を乞ひゐたる者にして即ち人々の擯斥する所の者にてありき、此故に彼が主イエスを呼びし時群集の人々彼を賤しむの餘り緘黙と一聲彼を戒めたり、如此人は皆自ら傲慢の心あるが故に此乞食の聲を聞く事を耻とすれば、主イエスに於ても亦然らんと想像して彼を戒めしなり、然るに主イエスは如何に、彼其聲を聞て立止り彼を召と命じたまふ、あゝ是れ何たる恵ぞ、何たる愛ぞ、主イエス素より彼の聲に應じたまはずとも彼に於て決して耻とならず、否人々却て之を見て當然の事と思ひしならん、されど主の御心は愛の外あらざれば彼の聲に應じて彼を憫みたまひたり、是に由て觀れば彼は稱賛せられて多くの人の首たるよりも寧ろ此一人の盲者の目を開く事を以て喜びとなしたまひしを推知し得べし、而して此事は却て多くの人を辱むる機となりしなり、我思ふ、かの盲者は元來無一物の者にして又何の權をも有せざれば彼が目開になりし後の喜びは唯だ主イエス御自身のみにてありし事を、然り彼は主を喜ぶ外に又喜ぶ物なかりしが故に彼に従ひ往きしなり、弟子等は此二人の盲者の目を開きたまひし事實に由て如何に主の愛の洪大なるを教へられしぞ、盲者が神の造りたまひし萬物を見る事能はざるが如く、我等も亦盲者にして日々神の御行爲を見る事能はざりしも神は之を見させんが爲に我等の目を瞭になしたまひたれば、我等の日常に主を眺め而して彼と共に交に於て歩まば幸なり、我等今回の如く一年の中數日間多くの兄弟等と共に集められし時にのみ主との親しき交を味ひ其餘日は主との交なしに歩むとも可らんと思ふや、我等の心果してかくの如くんば此は甚だ不幸なる心にして又主の旨に適はざる心と云はざるを得ず、我等は日々彼の旨や恵を味ひ識り而して彼御自身と親しき交に於て歩み常に喜

び居らん事を要す、

茲に又一人の目の開かれたる者あり、即ちかのペテロなり、彼は己が眞の様を露はされし時に其目全く瞭かになれり、彼は人々が主を付して己が我々の望を遂げし事を喜び居りし時、主を三たび讞らずと公言して彼を拒み捨つる所の者となりしが故に、彼は此失敗を後に思へば思ふ程如何に彼の心は悲嘆に満されしぞ、されど此悲嘆は彼が自己の全く無益なる者なるを最早主の前に於て何をも隠すの力なく、又詮術なき者と自ら深く悟りしより出で來りしが故に彼は此事實に由て其の目全く明瞭となりたるなり、(可十四の七十二節參觀)昔かのアダムは己が目の瞭なりし時に自ら力ある者と考へ、己が罪を隠さんとして裳を作りて之をまといたり而して彼エホバの聲を聞くや、其身を園の樹の間に匿しんと雖も、是は只だ其身を匿たるに止りて彼はエホバの光を全く避る場所を持たざりし、されどペテロはかの大失敗に陥るに先ちて彼の心の如何なるを知りたまふ主より、預め言を聞かしめられたり、是れ彼が純粹の恩と云はざるを得ず、神の言は両刃の劍の如く筋節骨髓までも刺し割ち得るが故に彼の心

は實に此言に由て刺れたり、さればこそ彼は後に其言を思ひ出して甚く悲み嘆ぎたるなれ、之に反して十四〇五十一節にある一少年は如何、彼も亦主に従ひ歩みし者にて又同一の事情に出逢ひたる者なりしが、彼は醜くも己が夜具を打捨て裸にて逃れ去れり、されど聖書は彼が後に此失敗を悔ひて嘆き悲みし事を記さず、そは彼一時夜具を捨てたる事は悲みたらんも、彼更に之を買求むることを得たるべければ最早前の悲を忘れたるなるべし、如此ペテロは自己の力なき事を全く明にせられたるが故に彼は人々の主を十字架に付して威張居る時に自らを卑くして主を崇むる事を得るに至りたり、而して彼が如此なるを得しは單に主の言に由て照らされたるに因れば我等も亦之を心に銘し、常に主の言を聞き且それを以て照らされ居るの必要なるを知らざる可らず、何となれば我等は言に由て照らさるゝの外決して自己の無益なる事を示すものあらざれば也、

可十四〇二十二は主の御死を示せり、夫のペテロが主の御言に照らされて己が全く力なき事を發露はされたるからには此上彼に於て尤も要する者は何ぞや、即ち彼が罪に

對する贖なり、彼は最早自ら神の前に立つの力なき者と明にせられたれば、已に代りて其所に立つ人を要するなり、是に於てか主の死は彼の最も深く味ふべき恵となるるなり、如此我等も亦各自主の死の恵を味ふべきなり、抑も我等が何の爲に主の日に集めらるゝか、此は甚だ大切なる問題なり、而して其答は使二十〇七にして即ち我等がパンを擘かんが爲なる事是なり、夫のテーブルの上に置れたるパンは單に主の御死を示す所の物なれば我等は此パンを擘きて後に始めて一体の交を味ふ事を得るなり、何となれば主の死にたまはざる前に一体の交なるものあらざればなり、然るに我等は往々茲に心を用ひずして特にパンを擘く爲に集められ居ながら却て集の終に近きてパンを擘く事を爲すは何ぞや、我等若し一のパンをのみ目的として、それを擘んが爲に集る者ならば、取も直さず一体を擘くものも云はざる可らず、されど夫のパンは一体を示す物にあらずして單に主の死を示すものなれば我等は之を擘て後にこそ共に一体の交を爲すべけれ、此故に哥前十〇十七に「パンは惟一なり多くの我等もまた一体なり蓋みな「夫の」一のパンを享ればなり」(「夫」字脱)特に「夫」なる

字に注意すべし、而して夫のパンとは即ち哥前十一〇二十四のパンにして擘れたる主の体を示す者なり、如此我等はパンを擘く爲に集めらるゝ者にしてパンを見る爲にあらざれば此事を誤らざらん事を要す、嗚呼主は眞に我等の諸罪を負ひて我等の爲に死にたまひたり、我等は之に由て救はるゝ事を得たるなり、此故に我等は今彼の死を示して共に相交る事を爲さざる可らず、主も亦我等をして此事を爲さしめんが爲に其方法を教へたまひしなり、かゝるが故に我等彼の御死に由て救はれたる者はいかでパンを擘くの必要と其幸とを知らずして可ならんや、

本章に於てかのペテロが自己の全く無益なる事を教へられ、彼只主を喜ぶの外何もの事も學ばせられたり、彼は己が目の開かれし事に由て實に自己の如何なるかを知り得たるのみならず、之に由て益す主の貴價を知るに至りたり、彼は主と共に幾年が歩みし者なれども、彼は見し所の事に由て喜ぶと云はず、「信じて喜ぶ其喜樂は言難く且榮あり」(彼得前一〇八)と云現はせり、我等も亦彼の如く見ずして信じて喜ぶ事を得るなり、ペテロは彼前一〇十九に於て主の流したまひし血を指して「寶血」と

云現はせり、されど彼輩には其血を拒みたる事ありき、然に今之を賢といふ、譯なかるべからず、此は彼の目全く開かれて際になりたるに由る、かゝるが故に我等も亦際あまのりにせられたる目を以て主を見れば彼の貴さを明あきらに見る事を得、又之を以て己おのれを眺めば自己の全く無益なる者たるを明あきらに知り得るなり、

○讚美歌第二百二十番、

○詩篇第四篇三、六、七、八節

「なんぢら知れエホバ神を敬ふ人をわかつて己おのれにつかしたまはしことと」と(三節)我等若し神を敬ふ人ならんには既に世人の中より聖別せられて今神の賜とせられ居る事を知るを要す、而して聖別せられたる事を知る者は又之に伴ふ交際や喜樂や平安の世人と全く相反し居る事をも知らざるべからず、

我等が曩に世に屬る者にてありし時には我等が熱心に求めたる交際は唯だ世界的の交際にして即ち暗の交際にてありしなり、されど今は之に反し「エホバよねがわくは聖

顔の光をわれらの上にのぼらせたまへ」(六節)とて彼が光にある交際を彼に求むるに至る、あゝ此は如何に驚くべきの變化ぞや、我等暗にてありし時にいかでか彼が聖顔の光を求る事をせんや、我等は本性の罪人なるが故に彼の光の前に立たば忽ち亡ぶるゝの外なければ、管に之を求る事をせざりしのみならず、飽までも恐れ且つ忌み嫌ひたるなり、然るに「なんぢらわが面をたづねもとめよ」と(斯る聖言のありしとき)わが心なんぢにむかひてエホバよ我なんぢの聖顔をたづねんと云へり」(詩二十七〇八)との如く、今は我等が心、彼が聖顔の親しき交際を彼に求めて毫の憚ることなき者となりしのみならず、此交際の外に最早我等が心を喜ばしむる者又他に之れなきを知るに至りしは之れ即ち我等が聖別せられたる第一の証據と云はざるべからず、「光に命じて暗より照出しめたる神われらをしてイエスキリストの面にある神の榮光を知るの光を顯はさしめん爲に我等の心を照らしたまへり」(哥後四〇六)と、斯くの如く我等は常に彼が聖顔の光を以て照らされ、而して彼の親しき交際に於て歩まば其の幸は如何ばかりぞや、

次で其七節を見よ、「汝の我心にあたへたまひし歡喜はかれらの穀物と酒との豊なると  
 きにまさり」と記さる。我等が曩に世の屬にてありし時にわれらが喜とせし事は  
 如何なる物にてありしと、酒を飲む、美味を食ふ、美服を飾る等孰れも肉の慾、眼の  
 慾、生活のたかぶりに基礎せざる喜にてあらざるはなかりき、されど「笑ふ時にも  
 心に悲あり、喜のはてに憂あり」(箴十四〇十三)と云へる如く、世界的の喜樂は  
 如何に麗はしきも、皆極めて空きものにして而かもたい外面的のものなれば、一時五  
 官を樂しましむる事を得るも、それらのものは決して心を喜ばしむる事能はざるなり、  
 されど今我等が心に與へられたる喜びは之等と全く異り、即ち主イエスの「我またな  
 んぢらを見ん其時汝等の心喜ぶべし其喜樂を奪ふ者わらじ」(約十六〇二十二)と宣ひ  
 しが如く、我等の心單に主御自身を思ひ又彼を嘗ふ事に由て來る喜びなり、而して此  
 喜樂は慥にわれらの心に與へられし者なれば何者も能く之を動かす事あたはざるなり  
 、我等は如此世より又世に屬ける喜樂より聖別せられたるが故にわれらの有様は時に  
 世人に比して甚だ患ふる者の如く又悲む者の如く見ゆるの事情なさにあらずと雖も、

此はたい外部に屬することにして其中なる心の喜樂に至ては如何なる事情も能く之を  
 損する事を得ざるなり、此故に云へる言あり「憂ふるに似たれども常に喜び」(哥後六  
 〇四)と、嗚呼此特權は如何に大ならずや、之をかの際時も持續し得ざる世界的外部  
 の喜びに比して孰れぞや、  
 次て其八節を見よ、「われ安然にして臥またねぶらん、エホバよわれを獨にて坦然にを  
 らしむる者は汝なり」と、世の人は已れ依頼むべき者を持ちざるが故に其心常に戦々々  
 として寸時も平安ある事なく且獨離れ居るが如き時には一層淋しさを感じて何か目に見  
 ゆる氣紛らせを要する者なれども、我等は之に反して如何なる時にも主と偕に居る事  
 を知るが故常に安然に且つ坦然として臥又ねぶる事を得るのみならず、却て獨居る事  
 に由て一層主との親しき交際を深く味はしめらるゝが故に幸なり、如此我等は世より  
 聖別せられたる者なれば、我等の心常に此の交際や喜樂や平安を實際に味ひ居る事を  
 要するなり、



○歴代志略上第十七章二十七節、たはろてん約翰傳第一章十六、十七、十八節朗讀、  
 ○讚美歌第百四十二番、  
 ○民數記畧第二十三章二十節殊ことに「まご既にまひほ福社をたまへば  
わが我これをまよ變る事あはさるなり」と朗讀、

明治卅一年六月廿九日印刷

明治三十一年七月三日發行

大阪市北區若松町百八十五番邸

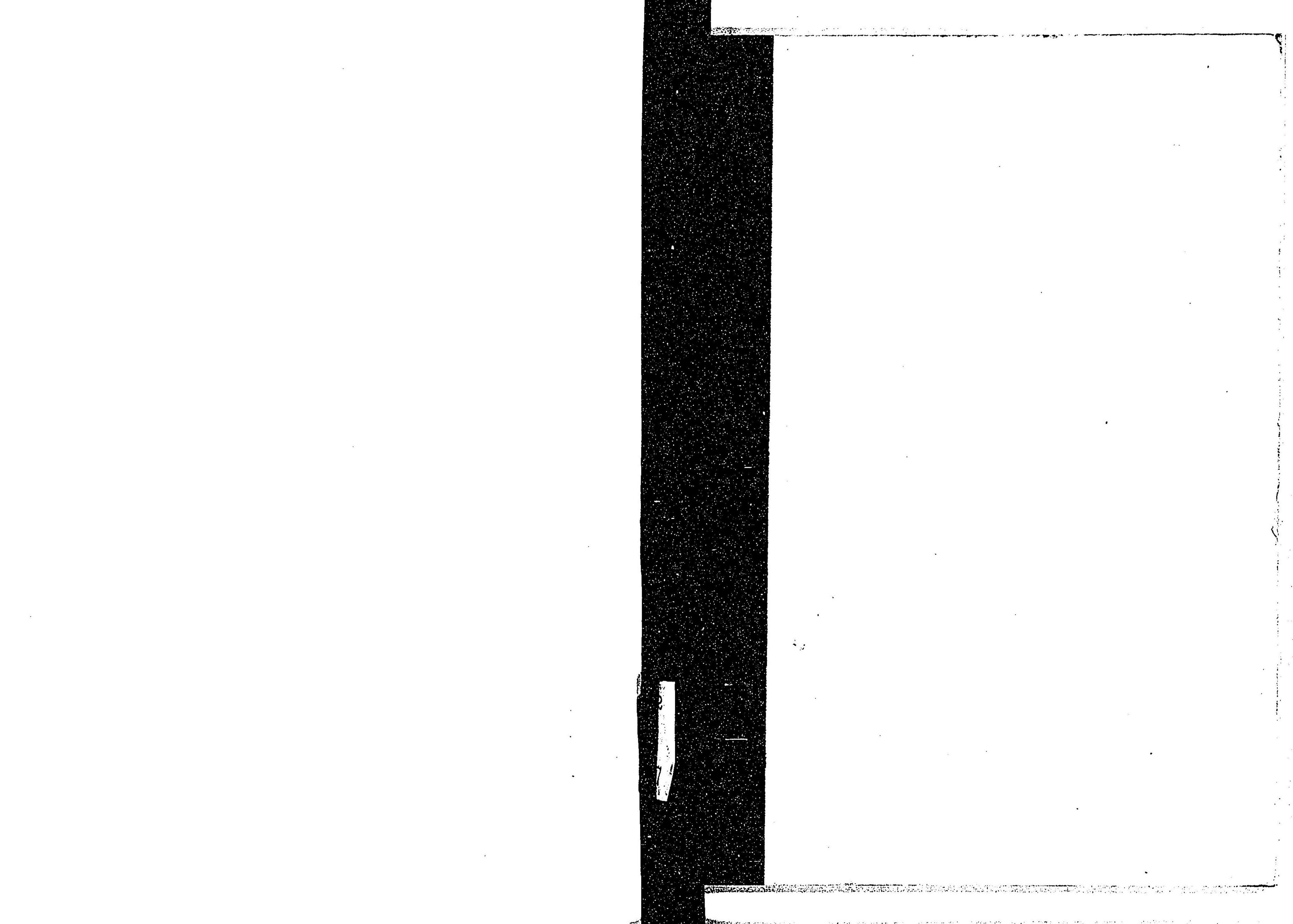
編輯兼發行人

林 寛二郎

京都市寺町二條下ル榎木町四十八番地

印刷人

田 中直次郎



集会記事

国立国会図書館

特

4